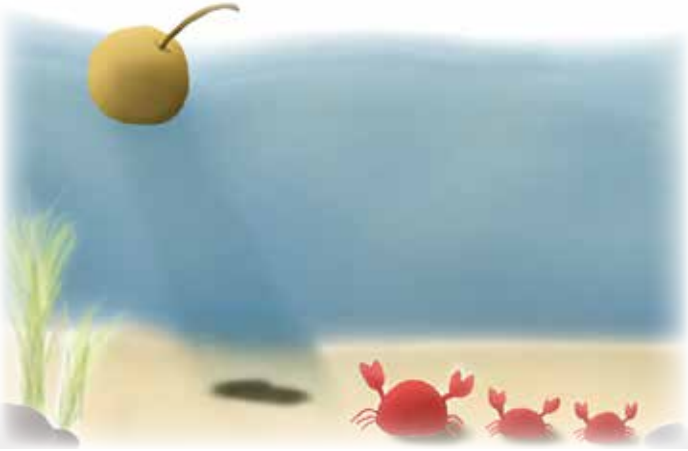
やさしい日本語で読む日本文学　レベル　中級

やまなし

【原作】宮沢賢治
【簡約】松田遥花・中野沙耶
【挿絵】松田遥花



小さな山と山のあいだの小さな川を写した二枚の青い写真です。

＊

一、五月

二匹のかにの子どもたちが青くて白い水の中でお話をしていました。

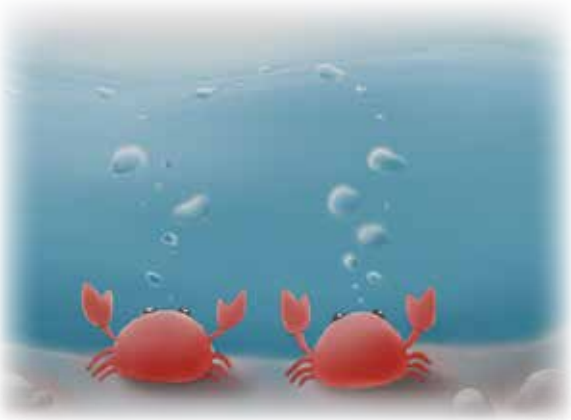
『クラムボンはわらったよ。』

『クラムボンはかぷかぷとわらったよ。』

『クラムボンは飛びながらわらったよ。』

『クラムボンはかぷかぷとわらったよ。』

上の方や横の方は、青く暗く見えます。水の上のところを
たくさんの小さな暗い泡が右から左へ行きます。
『クラムボンはわらっていたよ。』
『クラムボンはかぷかぷとわらったよ。』
『それならなぜクラムボンはわらったの？』
『知らない。』
小さな泡がたくさん流れていきます。かにの子どもたちも
ぽっぽっぽっと続けて五、六個泡を出しました。それは右に行ったり左に行ったりしながら



光って、右上の方へのぼっていきました。
お腹をこちらに見せて、一匹の魚が頭の上を急いで泳いでいきました。
『クラムボンは死んだよ。』
『クラムボンは殺されたよ。』
『クラムボンは死んでしまったよ……。』
『殺されたよ。』
『それならなぜ殺された？』

お兄さんのかには、その右側の四本の足の中の二本を、弟の頭にのせながら言いました。

『わからない。』

魚がまた急いで帰って、海の方へ行きました。

『クラムボンはわらったよ。』

『わらった。』

急にパッと明るくなり、お日さまの金色が夢のように水の中に降ってきました。

お日さまが光っているのが波によって、いくつもの糸のようになって集まっていました。

それは糸を組み合わせた、魚を取るときなどに使う網のようでした。

それが大きな白い石の上で美しく体を大きくしたり、小さくしたりしていました。

泡や小さなごみからは、棒のような影が、水の中に並んで立ちました。

魚が今度はそのあたりを泳いで、金色に光っているのを動かして、さらに自分は体の色を変えて光って、山の方へ上りました。

『お魚はなぜああ行ったり来たりするの？』

弟のかには聞きました。

『何か悪いことをしてるんだよ、とってるんだよ。』

『とってるの？』

『うん。』

そのお魚がまた帰ってきました。

今度はゆっくりと水に流されながら、お口を「お」の形にしてやって来ました。

その影は、黒く静かにその網の上を通りました。

『お魚は……。』

その時です。

急に上の方に白い泡が立ちました。そして、ぎらぎらと青く光る小さくて速い何かが、川の中に入っていきました。

お兄さんのかには、はっきりとその青いものの先が、鉛筆のように黒く細くなっているのを見ました。

と思っていると、魚の白いお腹がぎらっと光って、背中が見えて、それから上の方へのぼったようでした。ですが、そのあとはもう青いものもお魚の形も見えなくなりました。金色に光る網はゆらゆら動き、泡はつぶつぶと流れていきました。

二匹は怖くなり、声が出せないで、

そして動けないでいました。

そこに、お父さんのかにが来ました。

『どうしたの？怖いことがあったの？』

『お父さん、今変な何かが来たよ。』

『どんなもの？』

『青くてね、光るんだよ。さきがこんなに黒く細いの。それが来たらお魚が上へあがって行ったよ。』

『それの目は赤かった？』

『わからない。』

『うーん……。しかし、それは鳥だよ。かわせみと言うんだ。安心しろ、俺たちは大丈夫だから。』

『お父さん、お魚はどこへ行ったの？』

『魚？魚は怖いところへ行った。』

『こわいよ、お父さん。』

『大丈夫だ。心配するな。ほら、樺の花が流れてきた。見て、きれいだろう。』

泡と一緒に、白い樺の花が水の上をたくさん流れていきました。

『こわいよ、お父さん。』

弟のかにも言いました。

光の網は、体を大きくしたり小さくしたり、

花の影はゆっくりと、下に流れていきました。

二、十二月

かにの子どもたちは、あれからとても大きくなり、水の中も夏から秋に変わりました。

白くて丸い形の石が流れてきました。

光る石も流れてきて、止まりました。

そして、その冷たい下のところまで、月の光が水の中にいっぱい広がってきます。

水の一番上のところは青い白い火が動いているようです。

周りは静かで、遠くから波の音が聞こえてきます。

かにの子どもたちは、とても月がきれいなので、眠らないことにしました。外に出て、

しばらく静かに泡を出して上を見ていました。

『やっぱり僕の泡は大きいね。』

『お兄さんのやり方なら、僕だってもっと大きく作れるよ。』

『作ってみて。ほら、お兄さんより小さいでしょう？お兄さんが出すから見てよ。ね、大きいでしょう？』

『大きくないよ、同じだよ。』

『近くだから自分のが大きく見えるんだよ。それなら一緒に出してみよう。せーの！』

『やっぱり僕の方が大きいよ。』

『本当に？じゃ、もう一つ出すよ。』

『そんなに体を大きくしてはだめだよ。』

またお父さんのかにが出てきました。

『もう寝なさい。寝ないと明日いっしょに遊びに行かないよ。』

『お父さん、僕たちの泡、どっちの方が大きいの？』

『それはお兄さんの方だろう。』

『そうじゃないよ、僕の方が大きいんだよ。』

弟のかには泣きそうになりました。

そのとき、トブン！

なにかが水に中に落ちてくる音がしました。

黒く大きなものが、上から落ちて、

ずうっと下にきて、また上へのぼっていきました。

キラキラとそれの周りが金色に光りました。

『かわせみだ。』

かにの子どもたちは驚いて言いました。

お父さんのかには、目をたくさん前に出して、よく見てから言いました。

『そうじゃない、あれはやまなしだ。あっちに行くよ、ついて行ってみよう。ああ、いい匂いだな。』

水の中は、やまなしのいい匂いでいっぱいでした。

三匹は、ぼかぼかと流れていくやまなしについて行きました。

三匹のかにと三個の黒い棒の形をした影が、踊るようにして、やまなしの影について行きました。

間もなく水はサラサラと音を出し、水の一番上のところの波は青い火をあげているようでした。やまなしは横になって木の枝にとまり、その上には月が七色に集まって光りました。

『見て、やっぱりやまなしだよ、いい匂いでしょう？』

『おいしそうだね、お父さん。』

『待て待て、もう二日ばかり待つとね、やまなしは下へ落ちてくる。それからだんだんおいしいお酒になるから、さあ、もう帰って寝よう。お父さんのところへ来て。』

三匹のかには自分たちの家に帰っていきます。

波は青い火のように動きました。それは、小さなダイヤモンドの石たちがキラキラと光っているようでした。

＊

私の写真の中の思い出は、これで終わりです。

やさしい日本語で読む日本文学

『やまなし』

2022年3月1日発行

発行　宮城学院女子大学　学芸学部　日本文学科

印刷　株式会社 フロット

許可なしに転載･複製することを禁じます。